

PF 懇談会だより

PF 懇談会の活動を振り返って

前 PF 懇談会会長 三木邦夫

このたび、多くの皆さまのお力添えをもって、2年間のPF 懇談会会長の務めを終えました。この機会に、期間中の懇談会の活動を振り返ることで、皆さまへのご報告とさせていただきます。と思います。

1. PF 懇談会の活性化

PF 懇談会の会員数は700名足らずで横ばい状態ですが、PF で実験しているユーザーにはまだ入会していただいていない方が多くおられます。PF 懇談会の活性化の第一には、多くのユーザーに会員になっていただく、そのためには入会することによるメリットを開拓していき、また同時にPF 懇談会の存在感を高めようと努めました。活動の一つは、PF 懇談会がユーザーのより良い実験環境実現に貢献して、その存在を示すというものです。「楽しく実験できるように」とのキャッチコピーのもとに、実験しやすい環境のためのハードウェアとソフトウェア両面の充実を実現しようと試みました。実験しやすい環境というのは、PF 懇談会会員のみならずすべてのユーザーに恩恵があるものですので、その結果として、懇談会の存在を広くアピールしようとしたものです。幹事会メンバーが奔走された結果、次のようなことが実現しました。

- 1) ユーザー利用控え室を拡充する目的でプレハブに談話室を開設
 - 2) 上記プレハブ談話室内に長期利用が可能な鍵付きロッカーを設置
 - 3) 上記談話室の開設に合わせて、施設内の案内板を整備。
 - 4) 仮眠室のエアコンを整備
 - 5) 共用傘の貸し出しサービスを開始（傘立ても更新）
 - 6) 短期間の利用を目的とした鍵付きロッカーを運用
- これらは、もちろんPF 側の協力と支援があって実現したのですが、ユーザーからの声を反映させて、PF 懇談会から働きかけて整備できたことでもあります。

また、PF 懇談会への入会を促進するため、入会の特典として、実験ホール入退出のためのIDカードを保持するカードケース（「PF 懇談会」のロゴが入ったネックストラップ付き）を配布しました。これは、新規入会の会員に送付するのみならず、既会員にも希望される方には配布しました。ちなみに、会員の会費納入率は、さまざまな努力の結果、現在では80%を超えるまでになりました。

また、PF 懇談会により関心を持っていただくため、広報活動にも努め、PF の廊下に掲示板を設置して、懇談会のポスターを掲示しました。年数回程度の更新を計画しています。前幹事会から引き継いだWEB名簿も完成しまし

たので、必要に応じてホームページからの更新をお願いします。

2. 施設運営等に関するユーザーの意見集約およびPFとの意見交換

1) 食事提供福利厚生施設に関する意見集約
営業時間などが共同利用ユーザーには不便であった施設内食堂について、これを施設側に伝えて改善等をお願いしました。

2) ユーザーグループ運営ステーション制度に関する意見集約と意見交換

これまでの協力ビームライン制度から変更するにあたって、ユーザーの意見を集約しました（2009年4月）。これをもとに施設側と意見交換・協議を行い、最終的にはこの制度の変更を了承しました。

3) 3 GeV 運転終了に関する意見集約と意見交換

3 GeV 運転を終了することの影響についてアンケートを実施し、3 GeV 運転の継続を希望されているユーザーの意見を集約しました。これを受けて、全ユーザーグループに呼びかけて相談会（2009年11月、3ユーザーグループが参加）を開催して、PF 施設側との意見交換・協議を行い、ビームラインの移動等に対する施設側の協力を前提に、3 GeV 運転の終了を了承しました。

4) ビームラインの改廃に関わる意見交換

統廃合の計画が示された電子物性関係偏向磁石ビームライン、および廃止の計画が示された構造生物ビームラインのBL-6Aについて、関係するユーザーグループ（あるいはメタユーザーグループ）とPF 施設側が参加する相談会（2009年8月および2009年10月）を開催して、意見交換を行い、議論の結果、計画を基本的に了承しました。

3. 要望書、意見書の提出

PF のユーザーの立場から、さまざまな問題に関して、次のような要望書、意見書を関係方面に向けて提出しました。

- 1) 高圧UGからの要望に応じて、大型プレス（高圧ビームライン）のAR-NE7への移設のために、NE7に常設されていた素核研の測定ビームラインを撤去するよう要望しました（2008年5月）。
- 2) 食堂委託業者の変更に伴って、無効となる旧食券の交換取り扱いへの善処を要望しました（2008年9月）。
- 3) 放射光源加速器（PF およびPF-AR）の運転時間を確保していただくよう（最低年間5000時間）要望しました（2009年1月）。
- 4) リング運転状況の配信システムを開設するよう要望しました（2009年3月）。
- 5) 行政刷新会議・事業仕分けに対して、大学共同利用機関法人に対する特別教育研究経費（プロジェクト経費）を縮減しないよう意見書を提出しました（2009年11月）。

4. 定期的な行事活動

PF 懇談会が関わる重要な催しとして、PF と協力して行う放射光利用基礎講習会と PF シンポジウムがあります。

1) 放射光基礎講習会

2008 年度は 9 月に 2 日間にわたり、「放射光利用について知りたい！ 夢の光って何だろう？」というサブタイトルのもと開催しました（参加者は 34 名）。新しく放射光利用研究を始める方を主な対象者に、放射光の基礎技術と研究成果に関して講義を行うとともに、加速器、実験装置の見学案内が行われました。2009 年度は、放射光学会が主催する「放射光基礎講習会」に移行し、PF 懇談会は共催の立場で参加しました。この講習会の開催に向けてはその内容などに関して、放射光学会側と意見交換を行ってききましたが、引き続き、ニーズに適切に対応した講習会が開催されるように、関係方面との連携を強めていきたいと思えます。さらには、PF 懇談会が主催する講習会の必要性、あるいは PF 主催講習会への関わり方などの検討は今後の課題であると思われます。

2) PF シンポジウム

毎年 3 月に開催される PF シンポジウムは、2008 年度（第 26 回）、2009 年度（第 27 回）には、いずれもエポカルつくばを会場として開催されました。発表ポスター数は、それ以前に比べて倍増し、いずれの年も 300 件近くになったことは喜ばしいことです。PF 懇談会の使命である PF とユーザーの連携を促進するという視点から、懇談会主導の「PF の運営について意見交換会」を、その目的を明確化することで議論を充実させることを意識しました。そのため、施設報告、PF 懇談会からの活動報告、ユーザーグループからの議題提案を元にして、意見交換する内容をあらかじめ設定して活発な議論ができるように努めました。特に、前回議論したことがそのまま放置されることのないよう、議論途中の懸案事項のフォローアップにも努めました。具体的には、高エネ研の機器などに損害を与えたときの対応、ビームタイムの問い合わせ・確定通知時期、ポータルサイトの改善、KEK 実験課題申請システムの改善などが議論になりました。また、国際諮問委員会 (ISAC) からの指摘や、事業仕分けからの問題提起に対応するため、論文登録の促進と PAC 評点の見直しに関しても、それぞれ関心の高い事項であるため活発な議論がありました。協力ビームラインや教育用ビームラインの運営や評価、あるいは ERL 計画に関しては、まだまだ議論は尽くされておらず、今後のさらなる議論に委ねる必要があると思われます。この PF シンポジウムでの「PF の運営について意見交換会」は、これからも PF 懇談会主導の行事としてますます重要な使命をもつものになると思われます。

5. PF ニュースの PF 懇談会ページの充実

PF ニュースでの「懇談会だより」は、PF 懇談会からの情報・意見の発信としての重要な役目を担っています。その内容を充実する一つの試みとして、ユーザーグループの紹介記事である「ゆーぎーぐるーぶ紹介」をスタートしま

した (Vol. 27 から)。これは、ユーザーグループ間の相互理解を深めるために、各ユーザーグループの活動を非専門家でも分かる様に紹介してもらおうとするものです。ここでは、記事にユーザーグループからの PF への要望を書いていただき、これに対する PF 側からの回答を誌面に掲載するというかたちで、相互理解を深めようとしていますので、執筆して下さるユーザーグループはこの PF への要望欄を積極的に活用していただければと思います。

以上、ここでご報告した 2 年間の活動は、卓越した手腕で諸事を取りまとめ下さった足立伸一庶務幹事をはじめ、次の幹事会メンバーが担当された事項でそれぞれ努力された結果です。紙面の都合で、各メンバーの具体的なご担当は示せませんでした。最後にお名前をあげて感謝の意を表したいと思います。朝倉清高、手塚泰久、中野智志、五十嵐教之・各利用幹事、栗栖源嗣、兵藤一行・各行事幹事、千田俊也広報幹事、谷本育律会計幹事、岡本 薫、松葉 豪・各編集幹事（いずれも敬称略）。また、懇談会事務局の森 史子さんには、HP の更新管理を含め、事務的な仕事全般にわたって適確な対応をしていただきました。また、懇談会の運営委員の皆さん、ユーザーグループ代表者の皆さんには終始暖かいご協力をいただきました。PF の執行部をはじめとするスタッフの皆さんには、ユーザーの立場に十分の理解を示して対応して下さいました。合わせて厚く御礼申し上げます。

第 27 回 PF シンポジウム参加報告

大阪大学蛋白質研究所 栗栖源嗣

2010 年 3 月 9 日（火）～ 10 日（水）の会期で、第 27 回 PF シンポジウムが、つくば国際会議場エポカルに於いて開催された。昨年度に引き続きエポカルで 2 度目の開催である。会場費のことを考えずに申し上げると、つくばセンターに近いエポカルでの開催は東京方面からの参加者には格段に好都合であったと思う。前日の夜には、PF 懇談会の UG ミーティングが開催されたが、エポカルに近い物質材料研究機構の千現キャンパスを準備して頂き、スムーズな人の流れが出来ていたように思う。

初日は、例年通り PF の施設報告からスタートした。政権交代により実施された事業仕分けへの対応や、施設予算の削減など、厳しい施設運営の現状が説明された。経済環境が好転せず、文教予算が削減されていく現状で「施設の開発、運用、ユーザーサポートのバランスがどう保たれていくべきなのか？」、ユーザーとしても、非常に難しい判断がせまられる時期に来ていると感じたセッションであった。

昼食後に、文部科学省来賓の挨拶に続き、鈴木機構長のお話を伺うことが出来た（ちなみに、私は阪大総長から直に話を伺ったことは無い）。機構長からは、素核研を引き合いに出し、「放射光コミュニティーが十分に意見交換を

行い、外に向かって一致団結して意見発信するべき」とのご指摘であった。

初日午後には特別講演が2件プログラムされた。PF と PF 懇談会共催のシンポジウムに相応しく、施設開発とユーザー利用の立場からの特別講演である。Stanford 大の Winick 教授からは、Stanford 大における SLAC 開発の現状と、グローバルな視点で PF が果たしている国際的な指導的役割について SESAME を例にご説明頂いた。続いて、Weizmann 研究所の Yonath 教授の講演では、2009 年ノーベル化学賞の受賞対象となった、リボソームの構造研究が紹介された。様々な抗生物質がどのようにバクテリアのリボソームに作用しているのか、放射光黎明期の苦労話も含めてお話頂いた。Yonath 教授は、PF 初期の共同利用ユーザーであり、低温装置を用いた先駆的放射光利用の功績に対して KEK 特別栄誉教授の称号が授与された。

休憩を挟んでポスターセッションまでは PF 将来光源の話題提供があった。cERL に関しては補正予算による進捗状況の説明も行なわれ、KEK-X については、技術的な側面から議論がなされた。両方の将来光源とも、若い院生やポスドクの人たちが活躍する将来の光源計画であり、予算的になかなか厳しいことも話題となったが、その性能を考えただけでワクワクする話であった。夕方からは、ポスターセッションと懇親会がエポカルで開催された。ポスターと懇親会の会場が隣り合わせであったことは、大変良い選択であったと思う。移動時間を気にすることなくポスター会場で議論が弾むし、懇親会の参加者も大幅に増加して、非常ににぎやかな懇親会であった。

二日目は、招待講演とビームライン・測定器開発の報告が行なわれた。放射光研究の裾野の広さを象徴する以下の5件のご講演で、第一線の最先端研究が発表された。私自身、専門以外の研究成果をまとめて聞く機会は、このシンポジウムの他にはほとんどない。自らの浅学菲才を痛感するとともに、日本の放射光科学の底力を感じるセッションであった。

「黄砂の長距離輸送に伴う元素の化学変化と環境影響」

高橋嘉夫（広島大学大学院理学研究科）

「環動高分子材料の構造・物性研究とその実用化」



招待講演中の朴三用氏

伊藤耕三（東京大学大学院新領域創成科学研究科）
「新規抗インフルエンザウイルス薬の開発基盤となる RNA ポリメラーゼの構造解析」

朴 三用（横浜市立大学生命ナノシステム科学研究科）
「軟 X 線 dispersive-NEXAFS 法で観る表面化学反応」

近藤 寛（慶應大学理工学部）

「高分解能スピン分解光電子分光で探る、表面スピン電子状態」

奥田太一（広島大学放射光センター）

また、ビームライン開発の報告では、新設ビームラインの紹介が2件（BL-13A, BI-1A）、移設再編ビームラインの紹介が2件（高圧、イメージング）、ビームライン利用に関する報告が2件行なわれた。ユーザーからすると最も現場に近いご講演であった。

二日目の最後に、PF 懇談会の三木会長と足立庶務幹事の司会により、PF 懇談会総会と PF の運営に関する意見交換会が開かれた。UG 運営ステーションの運用状況、国大協保険の説明やポータルサイトの改善など、昨年からの継続議論がフォローアップされ、論文（学位論文も含む）登録依頼と PAC 評点への反映方法、人材育成のための方策や、教育用 PAC 申請などについて忌憚りの無い意見交換が行なわれた。この意見交換会は、幅広い研究分野で研究を展開し、大学、国立研究所、民間企業など、様々な機関に所属しているユーザーが一同に会して議論するほとんど唯一の機会である。私も含めて、もっと積極的に意見交換してコミュニティとして団結していく必要性を感じた。

今回の PF シンポジウムは、400 名を超える参加があり非常に盛会のうちに終了した記憶に残るシンポジウムであった。満員の参加者が見守る中で行われた Yonath 教授の特別栄誉教授称号授与式の模様が、翌日の新聞紙面を飾っていた。文字通り、記憶にも記録にも残るシンポジウムとなった。最後に、大成功で終了した第 27 回 PF シンポジウムを運営して下さった五十嵐実行委員長を初め、各実行委員と PF 秘書室の皆様方に心から感謝申し上げたい。



タイトなスケジュールの中のホッと一息。

構造物性ユーザーグループミーティング開催報告

ユーザーグループ代表 野田幸男（東北大）

岡山大学 津島キャンパスでの日本物理学会の第 65 回年次大会に合わせて、恒例の構造物性ユーザーグループミーティングを開催した。前回の物理学会より、学会会場でのインフォーマルミーティングと、食事をしながらの話し合いの場の 2 部構成でしたが、今回も、多くの方に参加頂き盛大に執り行うことができた。詳細を以下にまとめる。

<構造物性インフォーマルミーティング 第一部>

日時： 3月21日（日） 17:30-19:00

場所： 物理学会 GD 会場

1. PF 構造物性 UG 世話人挨拶

最初に、PF の構造物性ユーザーグループの世話人である東北大学の野田氏から、『PF のユーザーグループである「PF 構造物性ユーザーグループ」の親睦会と情報交換の場として 10 年以上前に自然発生的に起こった会合ですが、初期の段階から、原子炉の中性子や SPring-8 あるいは物性研からの参加と報告があり、出来るだけ全日本規模での会合としていこうという認識がありました。前回より物理学会でのインフォーマルミーティングとなりましたので、J-PARC の中性子とミュオンも加わり、放射光・中性子・ミュオンの施設を中心に、構造物性全般の情報交換の場として進めていきたいと思っております。』との挨拶がなされた。

2. 物構研施設報告

・構造物性研究センター（CMRC）

CMRC センター長・村上氏より、このセンターの組織説明として、縦糸として 4 つ研究グループが存在し、横糸として現在 5 つの研究プロジェクトが走っていることが紹介された。次に、センターの目指すサイエンスを、「グリーンイノベーションの基礎を作る構造物性研究」として紹介し、その中で走る 5 つのプロジェクトの説明が簡単になされた。さらに、センターが関わる放射光・中性子・ミュオンの施設の紹介をした。また、センターの日頃の研究活



図 2 構造物性研究センター報告を行う村上氏

動ということで、物構研シンポ・CMRC 全体会議・筑波大学との連携・CMRC 研究会などについて説明された。

・ミュオン施設

J-PARC でのミュオン施設の現状が、門野氏より説明された。特に、1 つのビームポートの利用しか出来ていないものの、ついにビーム強度が世界一となったこと、一方、アプリケーションの整備がまだまだであることが説明された。最後に、次の計画として、超低速ミュオンがあり、表面状態の測定に適していることなどのメリットが説明された。

・中性子施設

KENS 装置建設計画については、瀬戸氏より説明された。すでに、立ち上がり、利用フェーズに入りつつあるビームラインの説明や、今後建設予定のビームライン・装置建設の予定について説明された。また、これらの建設・利用に合わせて立ち上がった、複数の S 型課題についても説明された。その後、これらの建設・利用に関わる KENS の人員配置に関して、メンバー・担当ビームラインの紹介も行われた。

・放射光施設

構造物性ユーザーグループの関係する PF・PF-AR のビームラインの現状について、中尾（裕）氏より説明された。基本的に、各ビームラインが順調に共同利用に供されていることや、この秋、冬にかけて強化してきた測定機器について説明された。また、ここ数年、BL-4C の 4 軸回折計の x 軸部より異音が発生しているため HUBER 氏に見てもらったところ、重症であることがわかり、この夏にドイツに修理に行くことが説明され、ユーザーに了解を求めた。後、BL-3A の 1 つの目玉である移相子による偏光制御を利用した、磁気散乱の観測がようやく出来始めたことも報告された。最後に、BL-16A で行っている共鳴軟 X 線散乱のための、2 軸回折計の改造、立ち上げ状況や、最近の研究に関して簡単に紹介された。

3. J-PARC 報告

J-PARC 全体については、JAEA 新井氏より説明された。まず、これまでの J-PARC の立ち上げの歴史と、現在得ら



図 1 冒頭で挨拶をする野田氏

れているビームが、エネルギー・スペクトル、時間構造ともに、驚くべきほど当初の計算通りになっており、順調であること、また世界の他の施設に比べてかなり安定な運転ができていたことが報告された。

次に得られた中性子ビームの利用として、ビームラインの各装置の説明とともに、最近の実験結果について紹介された。特に、同じ出力をもつ他の施設と比較して、格段のS/Nでかつ、一挙に測定ができるということで、通常見過ごしがちな期待しないエネルギー・Q領域での発見につながっているという報告が印象的であった。

また、最近のヘリウム3の世界的な供給不足によって、中性子の検出器をどうするかが大問題となっており、ヘリウム3フリーの検出器の開発が国際協力のもと行われていることも報告された。

最後に、J-PARCでの実験結果は、J-PARC標準データフォーマットで中性子1個1個のイベント情報として保存されること、このため莫大なデータ量となるものの実験後に解析ソフトを用いることで任意の解析が出来るということと極めて有効なデータ保存形式であることが紹介された。

4. その他の報告

次に、JRR3MとJ-PARC関係の報告として、東北大野田氏より3つの報告があった。

(1) ここ数年、韓国と共同で開発してきた2次元PSD検出器が順調に動き始め、同検出器を用いた構造解析が韓国で出来るようになって来たこと、日本用の検出器の購入も出来たものの、ヘリウム3の高騰のため、一部のテストしかできていないことが報告された。

(2) J-PARCでの単結晶を用いた構造物性研究用の装置の建設が、共用法で通ったことが紹介された。

(3) 最後に、J-PARCのS-HRPDでのS型課題の話と、装置の性能の現状が報告された。

5. トピックス

最近のPF BL-16Aでの共鳴軟X線散乱研究の進展が、PF久保田氏より紹介された。最初に、BL-16Aの特徴と軟X線回折装置の概要が紹介されるとともに、共鳴軟X線散乱による研究のメリットが説明された。

その後、人工超格子 $[(\text{LaMnO}_3)_m(\text{SrMnO}_3)_n]_p$ の系の最近の研究の進展とともに、測定したての共鳴磁気散乱の実験結果、さらには薄膜系の磁気構造解析の可能性が紹介された。

6. その他

PF河田氏より、IXS2010 (<http://www.esrf.eu/events/conferences/ixs2010>) について紹介された。この秋にグルノーブルで開催されるという事と、若手へのサポートも検討中との事ですので、是非参加を検討下さいとの事でした。

<構造物性インフォーマルミーティング 第二部>

日時： 3月21日 19:30より

場所： 割烹津山

今回は、物理学会会場系の岡山大の池田氏により、半年前より会場を選定していただくとともに、当日定休日にも関わらず本会合のためにお店を開けて頂き、完全貸切で執り行った。料理もお酒も気が利いており、皆様に満足いただいた。

また、恒例の新人紹介では、構造物性ユーザーグループミーティングに初めて参加された方々に自己紹介をして頂いた。M1の若い方から、大先生のT氏、F氏、A氏の紹介まで、大変盛り上がりました。毎回、新人がいて、活気があっていいねえというありがたいコメントまで頂いた。

非常に盛り上がった第二部でしたが、その後、2次会、3次会と続いたとのことでした。次回の物理学会も、構造物性インフォーマルミーティングを行うので、皆様の予定に入れておいて下さい。

2009年度PF懇談会第3回幹事会議事録

日時：2010年2月22日(月)13時30分～15時30分

場所：KEK4号館輪講室2

出席者：三木邦夫、足立伸一、栗栖源嗣、手塚泰久、兵藤一行、谷本育律、中野智志、千田俊哉、五十嵐教之、若槻壮市、野村昌治、小林幸則

運営委員会、総会、意見交換会のための事前打ち合わせ

1. 幹事報告

◆会長挨拶 H20～H21年度の活動の総括

PF懇談会の活性化、PF懇談会からの要望書・意見書の提出、PFとPF懇談会の連携、その他定常的な活動
次期運営委員選挙の結果報告

◆会計幹事(谷本)平成20年度収支報告と平成21年度中間報告

今年度の大きな出費は選挙費用、カードケース購入等で10万円の赤字になる。

会費納付率(今年度76%)のために2年分の未納者のリストを運営委員会に提出する。

シンポの会場で呼びかける。カードケース配布の際に会員チェックと会費のチェックを行う。

原則として昨年と今年度分の納付をお願いします。

◆行事幹事(栗栖)第27回PFシンポジウムがエポカルつくばで開催される。3/8にUGミーティングを行う。ポスター数は去年とほぼ同じ。

(兵藤)放射光基礎講習会は今年度から放射光学会主催、PF懇談会共催の形で行った。物講研が今年からサマーチャレンジを行うことになった。

・サマーチャレンジについて(野村)

8/21～26に学部3年を対象に(35名程度)、研究者による直接の研究紹介の場を設けて、研究の喜びを実感できる機会を提供する。懇談会は共催の立場で、施設と一緒に考えて進めていく。→次期幹事への申し送り事項。

◆編集幹事(足立代理)PFニュースの発行実績。「ゆーぎ

「ぐるーぷ紹介」等の紙面の充実。

◆広報幹事（千田）PF 懇談会のポスターを掲示した。PF ニュースのPF 懇談会だよりに「ゆるーぐるーぷ紹介」欄を新設し7UGの記事を掲載した。PFへの要望欄を活用して欲しい。→次期幹事への申し送り事項

◆利用幹事 実験環境の整備, PF 懇談会会員のメリット, 施設運営等に関するユーザーの意見集約の3点の報告事項。

・実験環境の整備（五十嵐）短期用鍵付きロッカー運用, 共用傘の貸し出し, 談話室2の運用, 長期用鍵付きロッカー運用, 施設内案内板整備, 仮眠室のエアコン整備。リング状況配信システムについては今春からの運用開始を目指す。→周知するように

・メリット（手塚）入会促進のためのカードケース配布。カードケースを500枚購入。ネックストラップは企業から750本提供。→PFシンポの際にポスターを掲示し, 効果的に配布すること。

・ユーザーの意見集約（中野）食事提供福利厚生施設, UG運営ST制度, 3GeV運転終了に関してユーザーの意見集約を行った。施設内廊下に掲示板を設置して連絡事項や入会の呼びかけのポスターを作成した。UGミーティングの告知←五十嵐マター。UG運営STの評価内容の明文化と新規の募集をどこかで行う←施設マター。

◆各幹事報告の後に, 20年度決算報告, 次期会長と運営委員, サマーチャレンジ共催の3点を承認事項として運営委員会に提出。

◆選挙の方法: 推薦されたことを知らずに候補者名簿に掲載されていたことについては, 当選しても拒否できる仕組みがあるので現状の方法で問題ないとする。

2. 協議事項

◆「PFの運営についての意見交換」で取り上げる議題について

- ・ 昨年の意見交換での議題についてのフォローアップ
UG運営ST, 損害賠償保険について等
- ・ 「PFユーザーの集い」の議論を踏まえて
PACの評点審査方法の変更案について
- ・ 前日に開かれた「UGミーティング」での議論を受ける
代表者に事前に連絡する。
- ・ 研究者育成制度

UGにメールを流して上記の他にも取り上げて欲しい議題を上げてもらう。

◆放射光若手研究者育成制度（手塚）

大学に所属する大学院生が一定期間PFに滞在し, 短期的には実験技術を習得し, 長期的には放射光施設の中核を担えるような研究者の育成を目指す。

アンケートをとる。

E型課題（未決定）と組み合わせられれば効果的。

3. フリートーク

◆将来計画をすすめると運転時間が減ることについてのユーザーの考えは?

具体的な数字があれば議論し易いが次年度予算がまだ決まっていない。

平成21年度第2回 PF 懇談会運営委員会議事メモ

日時:平成22年3月10日(水)12時00分~13時00分
場所:つくば国際会議場会議室

出席者:(所外委員) 雨宮慶幸(東大), 尾嶋正治(東大), 高橋敏男(東大), 馬場祐治(JAEA), 水木純一郎(SPring-8), 百生敦(東大), 渡邊信久(名大), 三木邦夫(京大・会長), 手塚泰久(弘前大・利用), 中野智志(物材・利用), 栗栖源嗣(阪大・行事), 千田俊哉(産総研・広報), 松葉豪(山形大・編集), 浦川啓(岡山大・次期運営委員), 船守展正(東大・次期運営委員), 中山敦子(新潟大・次期運営委員), 林好一(東北大・次期運営委員)
(所内委員) 足立伸一(庶務), 飯田厚夫, 野村昌治, 本田融, 村上洋一, 若槻壮市, 五十嵐教之(利用), 兵藤一行(行事), 谷本育律(会計), 中尾裕則(次期運営委員), 森史子(事務局)

【報告】

1. H21年度活動の総括(三木)

- ◆PF 懇談会の活性化 メリットの開拓
カードケース配布, 施設運営等に関する意見集約, 実験環境の整備
- ◆PF 懇談会からの要望書, 意見書の提出
- ◆PF とPF 懇談会の連携
ビームライン改廃と3GeV運転廃止についての議論, 論文登録とPAC評点の見直し

◆ 定常的な活動

2. 会計幹事報告(谷本)

- ◆平成20年度収支報告 要旨集を年2回発行し, 57,780円の赤字 承認
- ◆平成21年度中間報告 納付率76% 予定にないカードケースを購入
- ◆未納者リストを回覧
- ◆自動振込の割合は38% 新入会員については自動振込をお願いしている。

3. 行事幹事報告

- ◆第27回PFシンポジウム開催(栗栖)参加者, ポスター一件数共に去年を上回った。
- ◆放射光学会主催「放射光基礎講習会」(兵藤)

4. 編集幹事(松葉)

- ◆紙面の充実 Vol.27-1から「ゆるーぐるーぷ紹介」の連載をはじめた。
- ◆PF 懇談会から発行費補助として40万円/年, と著者への謝礼として30,000円(5,000円/人)の補助を受けている。

5. 広報幹事報告

- ◆掲示板を設置, PF 懇談会HP, PF ニュース「PF 懇談会だより」について

6. 利用幹事

- ◆より良いユーザー環境の実現に関する活動報告
・(五十嵐) 短期用鍵付きロッカーの運用, 共用傘の

貸出、談話室の整備と運用、長期鍵付きロッカーの運用、施設内案内板の整備、リング配信システムの検討
Q) リング配信システムについてはどこかのリングはツイッターを利用しているところもあるようだが

A) 即時情報が必要なので、登録の手間がかかるがメール配信システムの方が良いと思う。

・(手塚) カードケースを500枚購入し、ネックストラップを企業に提供してもらい、新規入会者と希望の会員に配布している。

・(中野) 施設運営に関するユーザーの意見集約

1) 食事提供福利厚生施設に関して、2) UG 運営 ST 制度に関して、3) 3 GeV 運転終了に関して

◆ 将来計画へのユーザー側からの働きかけに関する活動報告

ERL 計画に向けての体制作り (サイエンス研究会等)

【協議事項】

1. 次期会長、運営委員の選出について

三木会長から北海道大学の朝倉清高氏を会長として提案され、拍手で承認された。

2. 物構研サマーチャレンジの共催について

大学3年生を対象とし、第一線で活躍する研究者による直接の研究紹介の場を設け、次世代の基礎科学を担う若者の育成を目指す

場所：KEK_IMSS, PF 及び MLF@J_PARC

日程：2010年8月21日～26日

予算：加速器科学総合支援事業

募集人数：35名程度

PF 懇談会は共催することで承認された。

【その他】

・運営委員の選出について

候補者になる時に意志を確認すべきであれば選出方法について検討するよう、次期幹事への申し送り事項とする。

平成 21 年度 PF 懇談会総会議事メモ

日時：平成 22 年 3 月 10 日 (水) 15 時 00 分～15 時 30 分

場所：つくば国際会議場・中ホール 200

【報告】

1. 総会定足数の確認

◆ PF 懇談会会員数：678 名

◆ PF シンポジウム参加者数：405 名

うち PF 懇談会会員：207 名

◆ 総会委任状：157 通

◆ PF 懇談会会則第 17 条「総会の定足数は、会員数の 1/10 とする。ただし、出席は委任状を以て代える事ができる」より、本総会は成立している。

2. H21 年度活動の総括 (三木)

◆ PF 懇談会の活性化 PF 懇談会に入会するメリットの

開拓

カードケース配布

施設運営等に関する意見集約

実験環境の整備

◆ PF 懇談会からの要望書、意見書の提出
事業仕分けに対する意見書

◆ PF と PF 懇談会の連携

ビームライン改廃

3 GeV 運転廃止についての議論

論文登録と PAC 評点の見直し

◆ 定常的な活動

放射光利用基礎講習会 (放射光学会との共催)

PF ニュースの PF 懇談会ページの充実 など

3. 会計幹事報告 (谷本)

◆ 平成 20 年度収支報告 要旨集を年 2 回発行し、57,780 円の赤字。

◆ 平成 21 年度中間報告 納付率 76% 予算案にないカードケース購入を運営委員会で承認の上、執行した。

◆ 自動振込の割合は 38% 新入会員については自動振込をお願いしている。

4. 行事幹事報告

◆ 第 27 回 PF シンポジウム開催 (栗栖) 参加者、ポスター件数、共に去年を上回った。

◆ 放射光学会主催「放射光基礎講習会」を共催した。(兵藤)

5. 編集幹事 (松葉)

◆ 紙面の充実 Vol.27-1 から「ゆーぎーぐるーぷ紹介」の連載をはじめた。

◆ PF 懇談会から発行費補助として 40 万円/年、と著者への謝礼として 30,000 円 (5,000 円/人) の補助を受けている。

6. 広報幹事報告

◆ PF 内に掲示板を設置。今後年数回程度の更新を計画。

◆ PF 懇談会 HP。所属等の変更があった場合は、ホームページから会員情報の変更をお願いしたい。

◆ PF ニュース「PF 懇談会だより」に、「ゆーぎーぐるーぷ紹介」の欄を新設。これまでに、7 UG の記事を掲載した (掲載予定含む)。PF への要望欄を積極的に活用してほしい。

7. 利用幹事報告

◆ より良いユーザー環境の実現に関する活動報告

◆ (五十嵐) 短期用鍵付きロッカーの運用、共用傘の貸出、談話室の整備と運用、長期鍵付きロッカーの運用、施設内案内板の整備、リング配信システムの検討

◆ (手塚) PF 懇談会入会促進キャンペーンとして、カードケースを 500 枚購入し、ネックストラップを企業に提供してもらい、新規入会者と希望の会員に配布している。既会員には希望者に配布している。

◆ (中野) 施設運営に関するユーザーの意見集約をメールベースで行った。

・食事提供福利厚生施設に関する意見集約

- ・現在の営業時間などが共同利用ユーザーには不便である実態について、施設側に伝え善処を依頼した。
- ・UG 運営 ST 制度に関する意見集約
- ・旧協力 BL 制度からの変更について、ユーザーの意見を集約した。これをもとに施設側と協議を行い、最終的に制度の変更を了承した
- ・3 GeV 運転終了に関する意見集約
- ・意見を集約し、運転継続を希望するユーザーと施設との協議を行った。BL 移動等の施設側の協力を前提に、運転終了を了承した

8. 次期会長、運営委員の選出について

三木会長より、運営委員会において北海道大学の朝倉清高氏を次期会長として承認したことが報告された。朝倉次期会長からのメッセージを足立庶務幹事が代読した。

*** 朝倉次期会長からのメッセージ ***

PF 懇談会の皆様

北海道大学の朝倉清高です。このたび、PF 懇談会の会長を謹んでお受けいたします。

今 PF を取り巻く環境は、決して順風というものではありません。新政権下で行われた事業仕分けに見られます様に、投資効率すなわち Cost に対する成果という観点で私たちは見られています。研究や教育の成果を定量的に示すことは難しいのですが、それでも私たち PF ユーザーは、社会の負託に答え、情報を社会に向けて研究成果を発信し、良い人材を輩出する努力を怠ってはいけません。PF 懇談会の一つの使命として、PF スタッフと共に、こうした地道な活動を続けていき、社会や研究者全体のコミュニティの支持を得ることと思います。

これと相まって、PF の将来計画の実現を如何に支援するかを考えていきたいと思っています。ERL 計画に対するサイエンススペースのディスカッションを深めるための活動を積極的に展開し、新規ユーザーの取り込みを図る方策を立てたいと思います。特に、学会ごとに担当を決めて、学会で、ERL 計画に対するサイエンススペースのディスカッションを開催してもらうようなことを企画したいと思っています。

最後に、国際的な大競争時代に突入した現在、PF も否応なく、大競争状況に追い込まれています。競争原理に基づく、選別というのが必要であるとも言われています。しかし、いっぽうで、真に萌芽的な新しい科学の形成は、競争原理だけからでは、生まれてこないことは歴史的な事実が証明しています。PF の共同利用というシステムが、こうした萌芽的な研究、新しい科学を育てる培地として優れていることは、Yonath 博士のノーベル賞受賞の例を引くまでもなく、皆さんすべてが共有している認識だと思います。この PF の持つ共同利用という概念が、大競争時代のなかこそ、きっちりと守られていくことが、PF 懇談会の使命と思っています。

これから2年間、どうぞ皆さんの暖かく、活発な応援宜しくお願いします。

9. 物構研サマーチャレンジの共催について

来年度8月にKEK主催で開催するサマーチャレンジについて、PF 懇談会の共催が要請され、運営委員会で承認されたことを報告した。

サマーチャレンジの詳細な内容について、担当の伊藤主幹が報告した。

サマーチャレンジは大学3年生を対象とし、第一線で活躍する研究者による研究紹介の場を設け、次世代の基礎科学を担う若者の育成を目指す

場所：KEK_IMSS, PF 及び MLF@J_PARC

日程：2010年8月21日～26日

予算：加速器科学総合支援事業

募集人数：35名程度

Q：修士1年の学生の参加も可能か。

A：大学3年生を主な対象としているが、余裕があれば可能性もある。

Q：どのように学生へのアナウンスを行う予定か。

A：素核研の場合は、春の物理学会でパンフレット、ポスターを配布している。物構研の場合は物理学会だけでなく、他学会にも配布する予定。

10. 総会の最後にあたり、三木会長から、2年間の任期中の活動への協力に対して、PF 懇談会会員の皆さんへの感謝のご挨拶があり、これを以て閉会とした。

PF の運営についての意見交換

第27回 PF シンポジウム

日時：2010年3月10日 15:30-17:00

場所：エポカルつくば・中ホール

1. 企画の趣旨説明

- ◎ ユーザーと施設の間のより緊密なコミュニケーションを図る。
- ◎ 「UG ミーティングでの討議事項」「施設報告」「PF 懇談会活動報告」などから、なるべくユーザー全体に関わる議題を取り上げる。
- ◎ 議論した内容を PF 懇談会幹事会で預かり、適切な方法で施設・ユーザーに再度フィードバックする。

2. 意見交換の進め方

- ◎ 昨年度（第26回 PF シンポ）での議論へのフォローアップ
- ◎ 施設側からの問題提起
PAC 評点の見直しについて
PF 運転経費の現状：運転時間と将来光源計画
- ◎ UG からの議題提案、その他の議題提案

3. 昨年度（第26回 PF シンポ）での議論へのフォローアップ

- ① UG 運営ステーションについて

◆前回 PF シンポジウム(2009年3月25日)の意見交換で、

UG 運営ステーションの進め方について、広くユーザーの意見を聞くこととした。

◆ PF 懇談会幹事会でアンケートにより意見集約。運営 WG の役割、予算配分方法、評価方法についての意見が出された。

◆ 運営委員会・UG 代表者会議（2009 年 7 月 8 日）で協議。以下のような運営方針が、PF 施設側から示された。

◆ 運営 WG メンバーの義務：装置の維持・管理、新規ユーザーの実験支援・教育

◆ 運営 WG メンバーの権利：グループ責任者は所内担当者を通じて予算申請を行うことができる。

◆ 予算の執行は所内担当者が行う。メンバーは共同研究員に準じてチームタイム外での出張も自動的に承認される。WG メンバーは優先 BT、あるいは留保 BT を利用して最大 25% のチームタイムを確保できる。WG メンバーは PF 内に居室スペースを確保できる。

◆ UG 運営 ST の評価：更新時期の半年前に PF 執行部及び PF 懇談会から推薦された委員で構成される評価委員会を開く。

◆ 協議の結果、PF 懇談会として旧協力チームライン制度に代わる UG 運営 ST 制度の設置と運用方法を承認した。

◆ 運営委員会・UG 代表者会議（2009 年 7 月 8 日）の議事録（http://pfwww2.kek.jp/pf-kondankai/kondan/katsudo/H21_luneiUG.pdf）

Q：問題提起された高圧 UG で、その後、意見・要望などは挙がっていないか。

A：PF で 7 月に開催された運営委員会・UG 代表者合同会議以降、施設側からユーザーの希望に沿った形での対応がなされており、その後は特に要望などは挙がってきていない。3 年後の UG 運営ステーションの評価については、今後の課題になると思われる。

②高エネ機構の機器などに損害を与えたときの対応（野村主幹より説明）

◆平成 22 年度より、国大協保険に「受託物損壊担保特約」が新設される。

◆被保険者が管理または使用する受託物を滅失・破損・汚損または紛失もしくは盗取されたことにより、受託物について正当な権利を有する者に対する賠償責任を、被保険者が所有、使用または管理している施設以外の受託物に限り担保される。

◆例えば、(事例 1)「A 大学の教員 B は、共同研究のため C 社が所有する研究機器を利用するため C 社を訪問。研究機器を使用中に、誤って損壊させてしまった。」は受託物損壊担保特約で対応可能。

◆しかし、(事例 2)「A 大学の教員 B は、共同研究のため C 社が所有する研究機器を借り受け、A 大学構内において研究機器を使用中に、誤って損壊させてしまった。」は適用外。

◆万が一の事態に備えて、各国立大学がこの特約に加入するよう関係部局に働き掛けて頂きたい。10 万円までが免

責となっている。

Q：この件は、施設側からユーザーに対して周知されるのか。

A：PF 懇談会側から周知を行いたい。

Q：ぜひ大学に戻って加入を働きかけたい。教員ではなく学生が損害事故を起こした場合、どうなるか。また 10 万円の免責について詳しく教えてほしい。

A：学生についてどこまでカバーされるかは把握していない。保険額については、上限 1000 万円、3000 万円、5000 万円の 3 つのコースがある。10 万円の免責は、10 万円までは保険を適用しないということである。

Q：国立大学法人以外の機関ではどうか。

A：国大協以外は把握していない。それぞれ調査をお願いしたい。

③チームタイムの問い合わせ・確定通知時期について

◆いまのところ、複数の放射光施設間での調整機構はない。

◆チームライン担当者毎に対応している。

④ポータルサイトの改善について

⑤ KEK 実験課題申請システムの改善

◆どちらも適宜改善を進めている。さらに改善すべき点があれば、PF 共同利用グループにぜひ挙げていただきたい。

4. 施設側からの問題提起

①共同利用の研究成果把握と審査への反映について

◎共同利用に係る問題点（野村主幹より説明）

◆論文・学位論文の未登録課題が多い。

◆ G 型課題の 37% で論文が登録されていない。

◆ PF-ISAC でも改善を指摘された。

◆アクティビティを機構長、文科省に十分示せていない

◆十分に競争的環境にないのではないか。

◆課題採択率 > 95%、BT 配分率 > 80%

◆予算削減 (△ 3.3%) の根拠とされた可能性もある。

◆成果を正確に把握し、効果的に社会に示す。

◆適切な競争の下、共同利用が行われていることを示す。

◆大学の中で共同利用研を位置付けてもらう事が PF の発展に不可欠

◎共同利用の研究成果把握と審査への反映

◆申請課題の採択時から遡って 2.5 年前から 8.5 年前に採択された課題について、採択課題数の 1/3 以上の課題について論文が登録されていない実験責任者について、事情を照会する (yellow card 調査対象)。

◆調査の回答に基づき、問題点の解析を行う。

◆回答がない実験責任者の申請課題は不採択とする。

◆論文登録の少ない実験責任者の申請については、実験責任者からの回答、該当期間の課題に関する論文登録状況、学位論文等の登録状況を考慮して、PAC 分科会で提案し、PAC で決定する。

2/3 以上の課題について論文登録がない場合は、-1.0 を基準とする。

1/3 を越える課題について論文登録がない場合は -0.5 を基準とする。

◎人材育成への貢献

◆人材育成型課題(仮称)：

◆大学教員と PF 職員がそれぞれの専門性を生かして、有為な人材(大学院生)育成に当たる。特にこれまで放射光を使っていないが、顕著な成果を上げられそうなグループを巻き込む。

◆教育用 BT：

◆大学でのカリキュラムとして、教育(実験、演習)へ活用。大学として PF を位置付けてもらう。

◆学位取得用課題(仮称)：

◆院生を計画的に指導し、有為な人材を輩出する。

◆この提案に対する「PF ユーザーの集い」での意見を紹介した。(PF 懇談会 HP に掲載済み)

http://pfwww2.kek.jp/pf-kondankai/kondan/katsudo/H22_tsudoi.pdf

◆教育用(E)課題に関連して、PF 懇談会幹事会での議論を紹介した。(手塚利用幹事)

◆現在、PF 懇談会では、放射光における若手研究者の育成に関する制度の検討を行っております。各大学に所属する大学院生(大学生)が一定期間 PF に滞在し、ビームライン整備や建設の手伝いをする事で、放射光の技術を基礎から学んでいく制度です。生の放射光研究に触れることで、短期的には実験技術の習得を、長期的には放射光研究の中核を担えるような研究者の育成を目指します。端的に言うと丁稚奉公のような仕組みで、PF における諸々の作業の手伝いを行っていきます。一方で、貢献度や技術の習得度に応じてビームタイムを獲得できる事を想定しています。更に大学の教員は、施設にまる投げするのではなく、他大学の学生を含めた短期ゼミなどを通して、研究者の教育に参加します。大学と PF 双方が負担し共に利益を得られるナショナルトレーニングセンター的な制度を目指しています。以下に、暫定的な実施案を示します。

◆期間は1ヶ月単位で、状況に応じて複数月選択できる。

◆学生はビームラインの仕事を手伝いながら、放射光技術の習得に勤める。

◆学生は、大学側教員の指導の下、研究計画をプレゼンする。総合評価に応じて(?)ビームタイムが配分される。

◆実験を行った場合、成果を発表する。学生同士でゼミを行う。

◆大学の教員は、適宜、全学生に対してセミナー等を行う。

◆PF は、学生の居室を用意する。

◆PF は、可能な範囲で住居の斡旋を行う(アパートの借り上げもしくは KEK 宿舍)。

C：論文登録が G 型課題の 37% で行われていないことについては、ユーザー側の認識の甘さに問題があるのではないか。

C：PF の課題の有効期間が2年間というのは長すぎるので

はないか。2年の間に、申請時の内容がすでに古くなり、同じ課題で新しい実験を行うという事例がみられる。このような場合には、申請内容との食い違いがあるので、論文登録がしづらくなる。例えば有効期間を1年間としてはどうか。

C：分野にもよると思うが、例えばタンパク質結晶構造解析分野では比較的一つのテーマに時間がかかる。半年や1年で課題申請書の作成に追われるよりは、2年程度の有効期間がふさわしいと感じている。試料名をあまり特定せず、比較的広いテーマ設定をするというやり方で対応できるかもしれない。

C：課題申請書に修士論文、博士論文を記入する欄を設けてはどうかという提案があった。国内外の施設で様々な有効期間の課題申請が行われているので、サーベイしてみるのが有効かもしれない。例えば、APS では、Rapid Access と呼ばれる課題が3、4割に増えている。ESRF では Block Allocation と呼ばれるシステムがある。これは、ある研究所・大学の過去の実績に応じて、研究内容を問わずにビームタイム配分を行うやり方である。

Q：若手研究者の育成に関連して、以前に PF の坂部グループで、国内のタンパク質構造解析研究室の学生を「ビームライン補助者(通称：助っ人)」として受け入れるシステムを運用していた。よくご存じの方にコメントいただきたい。

C：ビームラインアシスタントと呼んでいた。スタッフのマンパワー不足を補うために、アルバイトのような形で、主に博士課程の学生を1カ月程度の単位で受け入れて運用していた。旅費と滞在費が出ていた。施設側としては大いにメリットがあった。ユーザー側としてメリットがあったかどうか定かではないが、コミュニティーに顔が売れたというメリットがあったかもしれない。

C：学生を送り出す側としては、学生がビームライン調整のスキルを身につけてくれることで、ビームタイムの時に大変助かった。

C：アシスタントとして PF に滞在した側。1カ月の滞在中にトラブルを経験し、それに対応することでいろんな意味で自信になった。ユーザーであってもそのような機会が得られることは有意義だと思う。

C：メリットとしては、顔を売れること。いろんな企業からも就職のときに声をかけてもらった。アシスタント制度が終わったのは、トラブルが比較的少なくなったからである。現在は、ビームライン数が増えており、またいろんな開発も進めているので、マンパワーの不足は相変わらずである。学生さんがアシスタントとして常駐する制度が PF 全体として構築できれば、望ましいのではないかと思います。

C：マンパワーの問題は、分野にもよると思われる。引き続き検討したい。ユーザー側、施設側双方がメリットを得られるかどうか、重要なポイントだろう。

Q：教育用ビームタイムについても、ご意見を頂きたい。

C：PF が教育を重視して特徴を出そうとするのは非常に意味があると思う。7月、8月に運転があれば、授業の一環

としてやりやすいので、検討してみてもどうか。

C: 修士論文, 博士論文取得のための実験課題は, 学生を育てるために重要である。申請書の書き方について講習会を開催すれば, 非常に教育的であると思う。

C: 論文の中に少しでも放射光実験が含まれているのであれば, ぜひ登録すべきだ。

② PF 運転経費の現状: 運転時間と将来光源計画

◆若槻施設長から, 施設報告の補足説明があった。

◆PF&PF-AR の運転と cERL/KEK-X/ERL のバランスをどう取るかについて, 議論している。

◆35 MeV のコンパクト ERL を 2012 年度末までに周回させる方向で検討している。

◆平成 22 年度 1 億円捻出案を検討している。そのためには PF, PF-AR の運転時間を削減する方向も必要かもしれない。

◆コンパクト ERL 全体の予算プロファイルについて, 河田 ERL 推進室長から説明が行われた。22 年度だけでなく, 23 年度にも建設予算が必要。

Q: コンパクト ERL 予算については, KEK 加速器からどのような位置づけにあるか。

A: 機構の先端加速器研究開発経費等から, 超伝導加速空洞開発などについて捻出されている。リニアコライダーとの協調関係ができつつある。

C: 現状では ERL, リニアコライダーとも KEK の概算要求となっていない。しかし, KEK のロードマップには掲載されている。

Q: ある時期にマシンタイムの削減についてユーザーに対して提案があると考えればいいのか。

A: 22 年度については, 昨日 PF, PF-AR の運転時間削減を提案した。それ以降も, 建設費のねん出のために, 引き続き運転時間削減をお願いすることになる可能性が高い。

C: 前の議論とも絡むが, 例えば採択率を 6 割と決めて, 運転時間をそれに合わせて減らしてみようというのも一つのやり方ではないか。

C: ステーションの数を減らす, 旅費を減らすといったオプションも考える必要があるかもしれない。

C: 引き続き議論が必要な問題である。施設側からユーザーに対して情報公開をお願いしたい。

C: 今後, PF 懇談会を通じて, 意見募集・アンケートにより, ユーザーの意見を反映させるべき。

C: 昨年の事業仕分けで感じたが, 予算削減により PF の運転時間が削られれば, PF 自体の存在意義に関わることになるかと危惧する。コンパクト ERL が大切なのはわかるが, 運転時間を削減するのは最後の最後にしていただきたい。

5. UG からの議題提案, その他の議題提案

特になし。

PF 懇談会新規入会キャンペーン! 特典付き!!

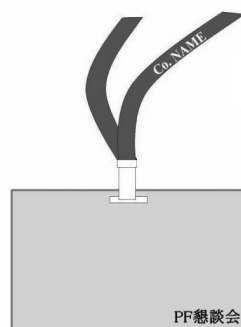
今, PF 懇談会にご入会いただくと, 入会記念に特製カードフォルダーをプレゼント!

ケースはハードビニール製で企業提供のネックストラップ付です。ID カードをケースから取り出すことなくカードリーダーを通すことができる優れもので, きっと PF での実験の際にお役にたちます。

また, 新規入会者には特別に入会手続きの書類と共に郵送でお届けします。

尚, 現会員で希望される方は事務局までご連絡下さい。皆様のご加入をお待ちしています。

PF 懇談会提供カードフォルダー



PF 懇談会入会のご案内

PF (Photon Factory) 懇談会は放射光を利用する研究活動を効果的に推進するため, PF の発展, 会員相互の交流, 利用の円滑化を図る利用者団体です。主に次の様な活動を行っています。

- ・会員相互の情報交換, 会員の放射光利用に関する要望のとりまとめ
- ・ユーザーグループ活動の促進
- ・PF シンポジウム, 放射光基礎講習会などの学術的会合の開催
- ・PF 将来計画の立案とその推進

PF での皆様の研究活動をより多いものにするためにも PF 懇談会へのご入会をお勧めいたします。なお, ユーザーグループは懇談会の下に作られた組織ですので, ユーザーグループへの参加には懇談会の入会が必要です。

詳しくは PF 懇談会ホームページをご覧ください。

<http://pfwww2.kek.jp/pf-kondankai/index.html>

<お問い合わせ>

PF 懇談会事務局 森史子

029-864-5196 pf-sec@pfiqst.kek.jp

運営委員メンバー
(任期：2010年4月～2012年3月)

	氏名	所 属
所 外 委 員	朝倉 清高	北海道大学触媒化学研究センター
	雨宮 慶幸	東京大学大学院 新領域創成科学研究科
	浦川 啓	岡山大学大学院自然科学研究科
	尾嶋 正治	東京大学大学院工学系研究科
	柿崎 明人	東京大学物性研究所
	栗栖 源嗣	大阪大学大学院理学研究科
	佐々木 聡	東京工業大学 応用セラミックス研究所
	千田 俊哉	産業技術総合研究所 臨海副都心センター
	高橋 敏男	東京大学物性研究所
	田淵 雅夫	名古屋大学大学院工学研究科
	中井 泉	東京理科大学理学部
	中川 敦史	大阪大学蛋白質研究所
	中山 敦子	新潟大学超域研究機構
	野田 幸男	東北大学多元物質科学研究所
	林 好一	東北大学金属材料研究所
	藤森 淳	東京大学大学院 新領域創成科学研究科
	船守 展正	東京大学大学院理学系研究科
	三木 邦夫	京都大学大学院理学研究科
百生 敦	東京大学大学院 新領域創成科学研究科	
渡邊 信久	名古屋大学大学院工学研究科	
所 内 委 員	足立 伸一	物質構造科学研究所・ 放射光科学第二研究系
	飯田 厚夫	物質構造科学研究所・ 放射光科学第二研究系
	五十嵐教之	物質構造科学研究所・ 放射光科学第一研究系
	伊藤 健二	物質構造科学研究所・ 放射光科学第一研究系
	小林 幸則	加速器研究施設・加速器第7研究系
	中尾 裕則	物質構造科学研究所・ 放射光科学第二研究系
	野村 昌治	物質構造科学研究所・ 放射光科学第二研究系
	本田 融	加速器研究施設・加速器第7研究系
村上 洋一	物質構造科学研究所・ 放射光科学第二研究系	
若槻 壮市	物質構造科学研究所・ 放射光科学第二研究系	

幹事会メンバー
(2010年4月現在)

	氏 名	所 属
会 長	朝倉 清高	北海道大学
庶務幹事	雨宮 健太	物質構造科学研究所
利用幹事	腰原 伸也	東京工業大学大学院
	近藤 寛	慶応義塾大学
	篠原 祐也	東京大学大学院
	中尾 裕則	物質構造科学研究所
行事幹事	渡邊 信久	名古屋大学大学院
	兵藤 一行	物質構造科学研究所
広報幹事	沼子 千弥	徳島大学大学院
会計幹事	青戸 智浩	加速器第七研究系
編集幹事 (2010年度)	吉岡 聡	九州大学大学院

PF 懇談会ユーザーグループ
(2010年4月現在)

	ユーザーグループ	代表者氏名	所 属
1	XAFS	田淵雅夫	名古屋大学
2	酵素回折計	猪子洋二	大阪大学
3	タンパク質結晶 構造解析	三木邦夫	京都大学
4	小角散乱	平井光博	群馬大学
5	放射線生物	前沢 博	徳島大学
6	粉末回折	井田 隆	名古屋工業大学
7	高圧物性	竹村謙一	物質・材料研究機構
8	構造物性	野田幸男	東北大学
9	将来光源 高エネルギー利用	桜井 浩	群馬大学
10	表面化学	吉信 淳	東大物性研
11	固体分光	藤森 淳	東京大学
12	原子分子科学	副島浩一	新潟大学
13	量子ナノ分光	尾嶋正治	東京大学
14	核共鳴散乱	小林寿夫	兵庫県立大学
15	位相計測	百生 敦	東京大学
16	低速陽電子	長嶋泰之	東京理科大学
17	医学応用	松村 明	筑波大学
18	軟X線発光	手塚泰久	弘前大学
19	表面界面構造	高橋敏男	東京大学
20	固液界面	近藤敏啓	お茶の水女子大学
21	マイクロビーム X線分析応用	中井 泉	東京理科大学
22	表面 ARPES	加藤博雄	弘前大学
23	物質物理	佐々木聡	東京工業大学
24	X線トポグラフィ	山口博隆	産業技術総合研究所